

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

30 生と死の決算

第三十日め（四月十四日）

午前六時。すでにモージは起床している。

嫁たちはもう石垣へいったかもしれない。いつもの作業がはじまるだろう。きちんとそれを確認しなければいけない、と思いつつも、おきる気にならない。モージ母は、ラマ僧の寝ていたふとんをたたみながらいう。

「二人の客は、おなじじゃない。一人はさっさと起きて、かえるのがうれしい。もう一人は起きないでいて、かえりたくない」

そうなのだ。起きてしまったら、最後の一日がはじまってしまふ。だから、起きたくなかった。

すべてが、すでにみなれた光景である。石垣のなかでは、朝の哺乳補助の風景。哺乳に介添してもらっている子畜も、一昨日、昨日とはぼおなじ。つづいて、群れのなかから出産したものをとりわけ、母子捕提。子をひろい、それをおとりにして、母をおびきよせる風景。放牧まえに出産がちかづいているものをとりわけ、作業。そして、放牧へ出発。

やがて、きょうもまた、放牧地でうまれた子たちが袋ではこばれるであろう。その子たちは、日がくれるころ帰営する群れのなかから、母とめぐりあふ。そこでもまた、子がおとりになって、母がよびよ

せられる。放牧地から直接、母とともに帰営する子もいるであろう。そのときもなおまた、子をひろつて、それをおとりに母をみちびいたりする。

あらゆる介入の場面で、母子のきずなが活用されてきた。このきずなに問題が発生したとき、哺乳・授乳をめぐる、あらたな介入が展開する。なにも問題がなくても、うまれたときから子に、うんだときから母に、人は母子関係へと介入しているのである。

出産シーズンは、母子のきずなをめぐる介入の季節なのであった。

昨夕、老父母が、ヒツジ・ヤギの搾乳をしていたころの話をしてくれた。搾乳があった頃も、出産シーズンはいまとおなじように管理する。やがて、搾乳シーズンがくると、子畜を母畜から毎日分離する必要があった。サーハルタの牧戸とグールギーレフした、という。

グールギーレフとは、「母子分離」を意味する。グールギーとよびかけるから、そうよばれる。グールギーと子畜によびかければ、子畜は自然に母畜からはなれてまとまる、という。毎朝、このグールギーレフをして、実母たちから実子たちを群れとして分離した。

分離した子ヒツジ・子ヤギは、別の牧戸にあずける。その家の群れでもまた、子畜を分離して当方にあずける。つまり、子を群れごと交換するのである。これが、サーハルタとよばれる関係である。サーハルタという「子畜交換」のシステムによって、放牧中に母乳が子に飲まれる心配はなくなる。

夕方、双方の群れで再度グールギーレフがおこなわれる。今度は、日中あずけられていた別の母たちからの分離であり、実母への面会をはたすものである。まず分離された子畜は、微妙な地形を利用して、母畜のみえないようなところで待機させておく。そのあいだに、牧戸はそれぞれ搾乳する。搾乳後に、子畜の群れを実母たちと対面させる。一日はなれていた母子がようやく面会できたそのときの喚声は、



朝の母子とり作業

母子ともにメーメーと劇的である。

毎日搾乳後にのこり乳をすわせることは、ひろく牧畜世界でみとめられ、めずらしくはない。しかし、このように、子畜交換のシステムが一般的方法として確立しているのは、めずらしい。しかも、それにもなう分離作業をよびかけの技術として体系化している。グールギーは、母子を分離するものとして定型化されたかけ声である。その意味では、母子のきずなを強化するためのトイグやチャイグと対立する。しかし、サーハルタのシステムのもとで実施される場合、グールギーのかけ声は、子畜にとって、母畜と対面するための契機ともなる。別の母たちからわかれて、ようやく実母とあうことができるからである。グールギーはじつは、母子をふたたび対面させるよびかけでもあったらしい。

子にとってあきらかに不利となる母畜からの分離行動を、よびかけ声で簡単に習得してしまうようにしむけるために、「子畜交換」サーハルタと「母子分離」グールギーはうまく組み合わせられて

いたようである。

ウシの頭数がふえ、ウシの乳だけで十分となった今日、ヒツジやヤギを搾乳することはめずらしい。だから、グールギーの歌はここではきこえない。

老父母が過去をかたる一方で、兄弟たちは未来をかたる。子どもの頃にすでに集団化時代であったかれらの経験は、伝統的なやりかたとも少々ちがっている。個人の自由にまかされるようになったいまは、なにもかも試行錯誤なのである。

本格的な出産時期になったので、

「ホグ、ボルジャー」

だとウジチャは伝統的な表現をもちいた。ホグになった、というのである。ホグとは、一般に、種オスにつける「貞操帯」をさす。貞操帯をはずして種オスが交尾をはじめように計画した出産期がきたから、ホグになったというのである。現在、ホグは使用されていない。群れから分離されていた種オスを群れにくわえることによって、交尾を開始させ、出産期を設定している。今年は、出産の様子がいつもとちがうらしい。

「シュドレン（二歳ヤギ）やトログ（二歳ヒツジ）はふつう、いちばん最後にでるのに、いまは関係なしにでている。わけがわからない」

という。未成熟メスの出産は、通常出産シーズンの後半に集中するものなのに、そうした傾向がみられないので、兄弟は不審に思っている。兄は、

「母畜のタルに問題があるにちがいない」

と推定する。タルとは肉づきのことで、今年は家畜がやせていて、肥えに問題があるとみているのだ。一方、弟は種オスに問題があるとみている。

「むかしは種オスを毎年交換してたけど、いまはずっとおなじものをつかっている。種オスをかえたほうがいいんじゃないか」

結局、兄弟は、この秋から種オスをふやすことにした。いまいる五頭のほかに、二、三頭くわえられることになった。

老父母は、搾乳していた時代のヒツジたちは、もっとおとなしく、しつけられていた、という。一方、兄弟たちは、むかしのヒツジたちは、もっとたくましかった、という。むかしはもっとたくましく、そしてなおかつ、おとなしかったのかもしれない。十年ひとむかしのあいだに、家畜たちの性格はすこしかわったかもしれない。

そもそも、動物の行動は可塑的である。十年もまたずして数日のうちに行動様式がかわることだってある。群れのなかをうろろして乳ぬすつとになっていたオンチンたちは、もうすっかり養母につきしたがう子ヒツジになっている。人間がどのような介入をするかによって、動物のとる行動はかわりうる。動物の行動が可塑的であるのに対して、人間の動物に対する行動は、文化によって特徴づけられている。

念入りな子畜の養育にみられる過剰な介入は、その典型的な例であろう。そこには、モンゴルの遊牧の特質がひそんでいるにちがいない。乳を人が横取りするまえに、乳をたくみに貸し借りして子にあたえ、去勢オスをいかしていく。その本質は、酪農よりもランチングに似ており、その意味で狩猟的である。

もちろん、乳は食生活をささえている重要なものであり、搾乳は生業の重要な一部門である。しかし、搾乳をめぐる儀礼にみられるように、祝されているのは乳利用ではなく、繁殖そのものである。家畜の肥育や繁殖を、草原のオープンスペースにゆだねておこなっているのが、モンゴルの遊牧である、とい

えよう。

しばしば比喩的に、家畜は元金に、乳が利子にたとえられる。一般に、「牧畜は、元金である家畜から利子としての乳を利用する生業である」と説明される。牧畜民は、元金である家畜を積極的に消費することはなく、いかしたままで、その乳を利用するのだ、とされる。しかし、それが牧畜というものなら、モンゴルの生業には別の語をあてよう。モンゴルのそれは、遊牧とよぼう。

モンゴルにみられる遊牧において、利子は乳だけではない。去勢オスも利子である。メスは成熟し、再生産することによって、当該の個体がかりに死んでしまっても、その生殖細胞をつうじて永遠にいきつづける。しかし、オスは成熟まえに去勢されることによって、その永遠のいのちの道をふさがれる。去勢されたときに、ふえていくことのない存在と化す。その意味で、もはや元金ではなくなる。利子となるのである。そこに複利法はなく、この利子はふえないが、つかうことができる。元金でないから、安心してつかえばよい。乗り物や牽引用としてつかい、食べ物としてたべればよい。去勢オスを利子とすることで成立しているのが、モンゴルの遊牧である。

乳を利子として理解するよりも、去勢オスを利子として理解するほうが、肉をもとめて殺していた狩猟と共通するであろう。牧畜の起源あるいはまた、それを成立させた搾乳や去勢の技術の起源が、モンゴルにあるというわけではない。たとえ技術の起源がどこにあったとしても、モンゴルの遊牧体系全体のなかにあつては、狩猟との連続性をもったものとして把握できるであろう。

モンゴルの自然環境はきびしいが、利子である去勢オスを豊富に維持することができる。ウマのように大量の草をたべる動物が、しかも群れでくらすほど、植生にめぐまれている。種類の異なる家畜が維持できるほどのバラエティがある。さらに、社会環境の面でも、利子である去勢オスが維持されやすい。フラットな草原のなかには、去勢オスを日常的に売却する相手がない。都市経済を基盤に、遊牧して



遠方に宿営地をのぞむ

いるわけではないのである。去勢オスを維持しうる自然環境と、維持させてしまう社会環境を背景にして、去勢オスを利子として成立し、これを最大限に利用するところにこそ、狩猟と連続したかたちでの遊牧の本質がある。それが、モンゴルの遊牧であろう。

けさまでに、百十六頭の子ヒツジが生まれ、くわえて双子が十八頭いて、五頭が死んだ。子ヤギは六十一頭生まれ双子九頭がくわわるが、七頭も死んだ。生と死の決算は、まだつづく。今年の春がおわっても、毎年、毎年、まだまだ、つづく。午後零時。最後の昼食は、羊肉うどんだった。

やっぱり、これがいちばんおいしい。昼食どきにくるだろうと予想されていた、外事局の4WD車は、まだこない。ずっとこなければよいと、わたしは思う。兄弟たちは、日本語を復習している。三十日のあいだに、わたしからたずねておぼえた日本語を、ノートをみながら復習している。

午後一時五十分、4WD車がついに到着した。

外事局のスタッフたちは、食事をするともなく、あつという間に出発のときがきてしまった。いままで時間はあれほどゆっくりながれていたのに。

南家のリンチェンドルジ兄とチョルム姉も、わざわざ見送りにきてくれた。

本家と分家とさらに南の二家からそれぞれおみやげにもらった、たくさんのチーズとバターを、最後に車につみこんで、車にのりこんだとき、みんながいった。

「サヨウナラ、サヨウナラ」

そしてだれかがいった。たぶんウニナーの声だったと思う。

「アナタニ、サヨウナラ」

モンゴル語を日本語に直訳したそのことばは、これまでできなかったことがないほどつくしくひびく、わかれの挨拶だった。